

「はむらの授業指針」子どもの視点⑤

自信が付く

ある中学校で1年生の国語の授業を参観したときの事です。

授業に先立ち、校長室で授業者から次のような説明がありました。「今日の授業では、スピーチを行います。入学直後、生徒たちの多くは、メモがなくては思うように話せませんでした。そこで私はメモを見ずに自分の言葉で話す力を育ててきました。ほぼ全員が目標を達成しつつあります。今日の発表者の中には、初めてメモを見ないで話すB君がいます。どんなスピーチを聞かせてくれるか、楽しみです。」

授業が進み、いよいよB君の番です。彼は緊張のあまり最初の言葉を発することができません。級友たちは、かたずをのんで見守っています。そのとき、授業者が声をかけました。「B君、気楽にやろう！」一瞬、教室の雰囲気が緩み、級友から「B君、がんばって。」という声が上がりました。

彼は、語り始めました。たどたどしくはありましたが、最後まで話し終えたのです。級友たちは、拍手を送りました。B君が自席に戻るとき、授業者は、「ようしっ！」と、一言だけ言いました。

授業が終わり、私は授業者と話すために教室に残っていました。大半の生徒が次の時間の準備のために退出した中、B君はまだ教室にいました。授業者はB君に歩み寄り、両腕で肩を抱きかかえながら伝えました。「B君、本当によくがんばった。私は、あなたがメモなしで話せると、信じていたよ。」

B君の目は潤み、手にしていた鉛筆はかすかに震えていました。そして、一言、「先生、ありがとうございます。」と言いました。

私は、授業者と共に教室を出て、廊下でこう問いかけました。「先生、B君に何か個別指導をなさったんですか。」「昨日の放課後、彼を職員室に呼び、明日何を話すのかを聞きました。「まだ考えていない。」というので、彼が今、興味のあることについて、しばし雑談をしました。」

この授業者は、B君のスピーチに関する「学びの履歴」を把握し、適時適切に指導を行っていました。また、B君がスピーチを終えたとき、長々と讃えませんでした。他の級友たちが既にメモに頼らずスピーチを行っていたため、長い賛辞は、かえってB君を傷付けてしまうと思ったのでしょう。

私はこの授業から、**個人内評価と、認め合い、支え合い、励まし合える学級**の大切さを改めて学びました。子どもは、こうした学習経験を積み重ね、「やればできる（自己効力感）」、「伸びている（自己成長感）」という実感をもち、自信を付けていくのです。



年下にも年上にも、きれいな言葉で

文筆家、クリエイティブディレクター 松浦弥太郎

親しくなるとは、「何でもOK」になることではありません。特に気を付けたいのが、言葉遣い。堅苦しいほど丁寧な言葉と、無礼なくらいカジュアルな言葉の中間がないのは、残念なことです。言葉遣いは心遣い。どんなに親しくしても、相手への敬意を忘れずに話しましょう。年上の人に気を使え、ということではありません。年上でも年下の人でも、きれいな言葉遣いを自分のベーシックとしましょう。

出典：「しごとのきほん くらしのきほん 100」（マガジンハウス）

※ 年下の人に丁寧な言葉遣い、すなわち心遣いできれば、年上の方には推して知るべしです。